

「高井」第三十四号別刷

前山古墳発掘調査報告書

中野市教育委員会

## 前山古墳発掘調査報告書

### 中野市教育委員会

#### 調査経過

今春「七瀬の藤沢栄治氏が自分の山畑を整地し、農作業の能率化をはかりたい旨相談を受けたが、そこには古墳があるので、この際発掘調査を行ない藤沢氏の意向を入れてほしい」旨、市文化財専門委員金井明夫氏と市誌編さん委員長針功氏から市教委事務局へ話があった。

遺跡分布図、文献からこの古墳は周知の古墳であるが、地元の藤沢氏の意向を汲み市誌編さん資料の立場からも要請されて、発掘調査を行なうこととし、諸般の準備を進めた。六月二八日付をもって文化庁長官あて八月一日から発掘調査を行ないたい旨届出をした。七月一日には市文化財専門委員会が開かれ、現地へ出向き現状の調査を願った。市教委は諸手統きと共に発掘体制の準備を整え発掘調査団の編成を進めた。その構成は次のとおりである。

調査責任者 土屋 忠男 中野市教育委員会教育長

顧問 金井喜久一郎 信濃史料刊行会編纂委員 長野県文化

財専門委員

調査団長 金井 汲次 中野市文化財専門委員 日本考古学協会

員

田川 幸生 長丘小学校教諭 日本考古学協会員

壇原 長則 中野市更科自営 長野県考古学協会員

金井 正彦 界中学校教諭 長野県考古学協会員

小野沢 捷 中野市農業委員会事務局 長野県考古学

会員

金井 文治 小布施町教育委員会事務局

調査補助員 中野市教育委員会事務局

調査協力員 長針 功、池田実男、藤沢栄治、小林行保、長針 正

畔上克臣、地元七瀬区、市土木建築課

事務局 中野市教育委員会事務局

教育次長 古川 光夫

社会教育係長 小池 章夫 同 主査 町田 佳久

六月二八日(土)文化庁長官あてに前山古墳発掘調査届を提出  
(発掘調査は八月一日からとする)

七月一日(火)市文化財専門委員現地踏査七月二九日(月)晴

炎暑 古墳の現況、地形測量を行なう。東西、南北各二〇メートルについて二メートル毎に測点、縦断、横断面のレベル測量、等高線を入れて地形図を作る。

七月三十一日(木)晴

明日からの発掘調査

にそなえて用具等の

諸準備をし現地へ搬

びテント張を行な

う。

八月一日(金)晴

炎暑 午前九時全員

集合、発掘調査につ

いて打合せ会を持

ち、古墳頂点部で供

養の読経、つづいて

くわ入れを行ない、

さっそく作業を開始

する。地表から約一

〇センチで早くも土

器片が出土する。再

び掘り下げ、遺構を

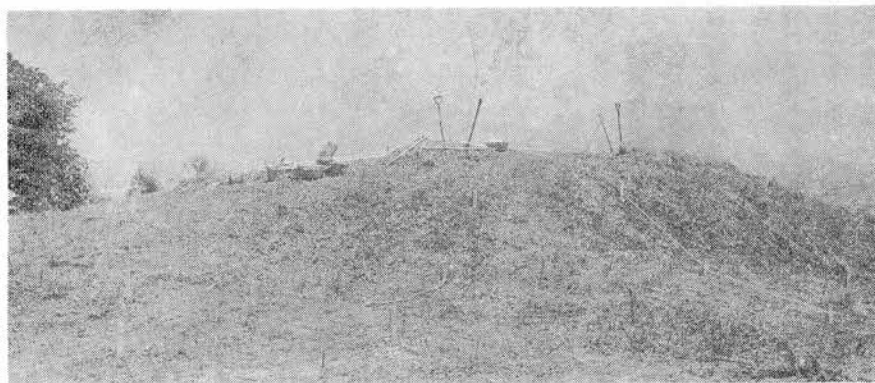
確認して第一日目の

作業を終る。遺物は

土器器片二〇数点。

参観者 中山翠市氏

ほか。



第1図 墳丘全景

八月二日(土)晴 猛暑 前日に続いて発掘を続ける。鉄鏝、直刀を検出、なおこのほかに副葬品ありやと慎重を期すも土師器片一〇余点のほかに出土品なし。

参観者 金井明夫氏ほか。

八月三日(日)晴 猛暑 午前中は更に遺物を探すも土師器片数片のみにとどまる。午後は古墳の構築状況調査のため東西、南北に従横に掘り割る。

参観者 保科 公氏ほか。

八月四日(月)晴 猛暑 前日に続く作業は午前中で終了、午後は測量後撤収作業をすませ周辺調査を行ない今回の調査は一応終りとする。

参観者 黒鳥信行氏ほか。

一〇月一三日(日)晴 地主藤沢氏が整地のためブルドーザーを導入することと再び前山古墳へ赴き、ブル運転手中島健氏にたのんで従横にたち割り、地層の調査を行なう。鮮明な地層の断面によって、古墳は豊野層の乳白粘土層へわずかに斜行する褐色砂礫層の地山へ、ごく簡単に墓拡を構築した構造を確認する。

参観者 藤沢政宣氏ほか。

(町田 佳久)

### 立地と歴史的環境

永峰丘陵は千曲川の蛇行に並行し、南北およそ九キロメートルに連なり、標高四八八メートルの壁田城山を除いては、四〇〇メートル

前後の標高で多少の起伏がある。

前山古墳は中野市大字七瀬字前山一二四二番地の二(台帳面は原野)にあつて、七瀬部落の西側の山腹に所在する。五万分の一地図「中野」のA点より二四・五センチ、D点より二五・八センチのところに当る。ここからは、七瀬部落を足下に、東北には中野扇状地、南方には延徳田園が展開している。また、中野市の東南部に点在する金鑑山古墳(新野)姥懐山古墳(更科)紫岩古墳(栗和田)をはじめ、山ノ内町の本郷古墳群の眺望ができ、さらに北方には高社山(一三五一)東南はるかに志賀高原の連峰が遠望できる景勝の地である。

この古墳を発見されたのは亀井正道・永峰光一先生である。信濃史料第一巻(考古編)編集のため、昭和二八年秋双子塚古墳を踏査された帰途のことであつた。七瀬部落へ通ずる坂道を降ろうとするときと眼前に、円墳がススキの穂のゆれる原野の中にあつて、墳頂上には松が三本生い茂つていた。地字名を冠して前山古墳と命名されたのである。かくして、信濃史料へは二一五番、文化庁の全国遺跡地図(長野県版)では七九〇四番と登載されている。

七瀬部落は、中野扇状地が東から西へ展開する中心線よりやや南寄りの扇端部に位置し、湧泉に恵まれ、また、扇状地を流下する堰が集水して水量の豊富などところでもある。弥生時代後期から稲作栽培が行われた地帯で、第一表によって知ることができる。

永峰丘陵の東南斜面の山腹には、小さな舌状台地がいくつつか発達して、その台地上には遺跡が存在する。五輪堂の裏手と泰運寺

第一表 遺跡表

名称	立地	摘要
七瀬遺跡	山腹の 台地	(弥生後期) 太形蛤刃石斧、 器台、壺、瓮、高坏 (土師前期) 埴三個、高坏、 その他破片多

の周辺台地は箱清水期の弥生後期から古式土師期にかけての遺跡で、出土遺物が多い。特に泰運寺境内から戦前に出土した埴は完形の優品で、高さ一四センチ、口径一七センチである。ここから更に西の台地には大徳寺遺跡(片塩)から西へ連続して安源寺遺跡があらって、台地下には肥沃な水田農耕地が展けています。

永峰丘陵は古墳の多いことで知られている。北には林畔第一・二号古墳(田麦)山ノ神古墳(厚貝)は既調査済みで「下高井」に報文が載せてあり、注目される著名な古墳である。なお、七瀬部落には第二表に示す古墳群が点在している。

双子塚古墳をはじめ七瀬一〜五号墳は丘陵鞍部の雑木林のなかにあって、墳丘は完全に保存されている。この丘陵中では七瀬古墳群が集中している点は注目しなければならない地域である。双子塚古墳(字南原一〇六一番地)は大正五年五月、七瀬青年団の手によって不用意の発掘が行われたことが惜まれている。以前には長野県の史跡に指定されたこともあるほどの整った前方後円墳で、昭和四七年三月二四日に中野市の史跡に指定されている。

七瀬部落から七瀬三号墳へ登る一筋の古道が通っており、通称

第二表 古墳表

古墳名	形状	規模	摘要
双子塚	前方後円墳	長七八 前方巾二五 高六・五 後円径四 八七・五	葺石、埴輪円筒、八乳鋸歯文鏡一、直刀一、矛一、三角板革留短甲、土師器、須恵器、大正一〇年青年団発掘
七瀬一号	円墳	径六 高一	完存 双子塚に接す
七瀬二号	円墳	径一六 高一・五	完存 双子塚に接す
七瀬三号	円墳	径一七 高〇・七	略々完存、東部は地すべりの跡あり、双子塚より東北一三〇メートルの所にあり
七瀬四号	円墳	径二二 高二・八	完存 双子塚より東北二五〇メートルの所にあり
七瀬五号	円墳	径一七 高一・八	完存 双子塚より東北四〇〇メートルの所にあり

「宮坂」と呼ばれ、この古道の右側にある。小池長重氏(七瀬)の談によると前山古墳から宮坂をへだてた西隣の台地状畑から四〇余年前に数片の鉄刀が出土し、自宅へ持ち帰って置いたが、現在は不明の由であった。(金井 汲次)

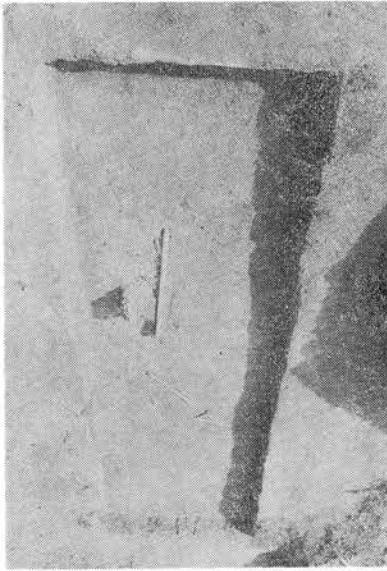
遺構

中野の市街地の西方の田園や村落をへだてて、通称長峯(長丘陵)と呼ばれる丘陵台地が、千曲川にそって細長く横たわっている。そのほぼ中央部に、奥信濃の千曲川東岸では、最北端の前方後

円墳がある。市の史跡にも指定されている七瀬の双子塚古墳である。この古墳の東北、約二百米の位置に隣接しているのが、今回調査された前山古墳である。

前山古墳は、丘陵頂上部よりやや東方へ突出した位置にある。丘陵を背に、眼下東方に、中野の市街地を中心とする中野扇状地を望める。周辺の志賀高原の山波と、高井の秀峯高社山を望み得る風致佳良な位置にある。また市内東方山麓や高社山麓、及び山ノ内町夜間瀬の古墳等も眺望できる位置でもある。

古墳の外形をみるに、形がくずれており、一見古墳かどうかまよるところがある。しかし南側は確然とした高塚としての区切れがみられる。西側もまたその区画がみられる。しかし東側と西側は平地にむかっている斜面のせい、高塚の末端が流出し、判然とした区画



第2図 遺構・遺物

はみられない。特に北側はその様相がいちじるしい。このような古墳であるので、明確な古墳の高さと直径は数字では言い切れないが、高いところで約二・四〇米で、経は約一六米〜一七米と言えよう。

今回の調査で明らかになった遺構は、大別して古墳内の竪穴式の粘土郭遺構と、古墳の構築の状況である。

まず粘土郭であるが、円墳のほぼ中央部に、ほぼ長方形の長さ三・九〇米、巾一・一一米、深さ〇・一〇米の存在を確認したことがある。この遺構の表土層からは、高坏の破片数十点を確認し、さらにその下部から、鉄刀一点と鉄鏃十数点が、この遺構内中央部から発見された。遺物は別項で示すこととして、ここでは遺構の特色をとらえることとする。

その一つとしてこの粘土郭の方位である。北の正位より四十五度東にふれており、その方位の先をたどると、高井の秀峯高社山の山頂に至ることである。高社山は、延喜式の式内社たる高社神社の峯であり、山頂から土師(1)の小破片の出土も知られている。古代から、山岳信仰と深い関係のある聖山でもある。したがってこの山に対する原始・古代からの信仰の対象としての遺跡が周辺にあっても不思議ではない。明確な調査で明らかなのは、時代は異なるが、山ノ内町夜間瀬の中世の千手寺経塚の石室の方位や、同町寒沢の富士宮の社殿の方位は、高社山頂に向けられている。したがって高社山は、古くから現在に至るまで、信仰の対象としての事例がみられる。

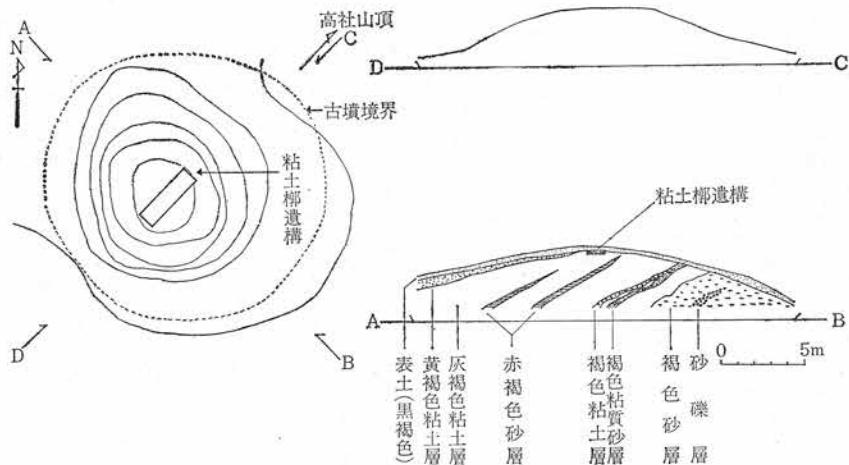
次に竪穴式の粘土郭を持つ古墳であるが、附近からその事例を求

めてみたい。奥信濃における古墳の学術調査は、比較的に例が少なく正確には言い得ないが、この古墳と中野扇状地をへだてて向かいあっている、東山山麓の姥懐古墳<sup>(3)</sup>もこの類と思われる。また前山古墳の所在する長峯を北に下ると、田麦林畔二号墳や、厚貝山ノ神古墳も竪穴式の粘土床であるが、この二者は丸太をくりぬいた木棺を置いたものと推定される。前山古墳ではその点は明らかでない。むしろ箱形状をなす粘土郭なるものが前山古墳の特色である。

さて高塚式古墳外部の様相をみよう。古墳を東西南北それぞれ四十五度ずらして、十文字にトレンチを入れて調べた。なおまた古墳をブルドーザーにて切りくずし、畑にする段階においての状態を示すと、次のようである。即ち表土十数センチほどは、今までの耕作による作物用の土壌となっている。この一部分または大部分が盛土と考えられる。しかし特に保存状態のよい南側は、灰褐色粘土の粘性が強固なもので、盛土はごくわずかである。むしろ削減したと思える。同じく保存のよい西側も赤褐色の粘性が強く保存がよいことは共通点と言える。それに比較して北側は、土質が軟弱の砂礫層のうえ、急斜面に連なる悪条件である。古墳の末端部には補強したと思える岩礫がみられたが、これは自然状態の岩礫層で、偶然に古墳を支えていたことが判明した。したがって南と西の面は高塚の保存がよく、東と北の面は保存がよくなかった。このように自然的条件たる土質と地形が関係しあって、保存状況を左右したと言いうことができる。

このような遺構の古墳を奥信濃だけにとつて考えてみるに、古墳

第3図 前山古墳遺構



の規模においては、比較的小規模古墳とみられる。また山陵を利用した竪穴式粘土郭の古墳の様相からみるならば、全国的にみるとさほど古式ではないものであろう。しかし信濃では比較的古い部類になり得よう。また地方の大豪族の墳墓とみるよりは、小豪族または有力者の古墳とみられる。なお近接する双子塚古墳との関係等は、総合的に考察したり、また今後の課題ともなるであらう。

(田川 幸生)

註1 高社山頂の遺物昭和四十九年五月山頂にて発見

2 「千手寺経塚」山ノ内町教育委員会 昭和五十年三月

3 「姥塚遺跡・更科裏の山遺跡」中野市教育委員会 昭和四十四年三月

4・5 「下高井」長野県教育委員会 昭和二十八年十一月

## 遺物

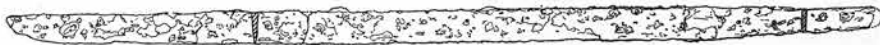
前山古墳の発掘調査によって検出した遺物は左の如くである。

直刀 一口

鉄鏃 一四本

土師器破片 小片一五点 細片四四点

直刀は、長さ八二センチで、柄の部分は一四センチで柄の一〇センチに当る部分に目釘穴と思われる所がある。刀長六八センチを数え、鏃の部分は平で厚さ、〇・六センチを測り、身幅は中心部で二・八センチである。現在の重要は、六二〇グラムである。土庄のためか、五三・七センチの所で折損しており、柄の部分も僅か反っている。木製の鞘に収められていたらしく、僅かに附着している。また、その外の装具は腐朽して復原は困難である。刀身には穂の部分



第4図 直 刀

20cm 10 5 0

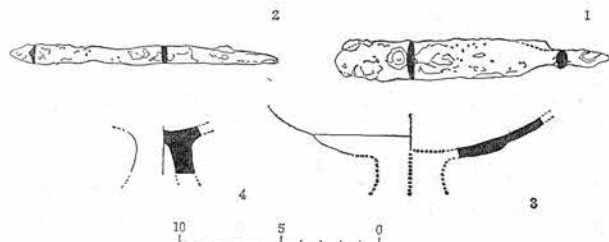
はなく、平作りで刃と柄の部分の関はなく次第に細くなって断面は長方形になって柄となっている。鈍はやや鋭どく尖っている。以上の如く観察するに、当時の実戦型の武器で葬者の愛用品であったと思われる。

鉄鏃一四本は遺存部分長一三〜一四センチで尖端が蛇頭型の尖根が三本、丸みをおびた剣型の平根鏃が一本、両者が混在して一束となって検出され、矢柄の所に木片が附着している。現在の重量が尖根鏃が一五グラム、平根鏃が三四グラムである。尖根鏃は三本とも同型の長頸で尖端部の断面は三角型をしめし、尖端より二・五センチの部分から長方形となって柄の部分にそのまま細くなっている。

平根鏃も一本とも同型と思われる、尖端より、八センチの部分まで柳葉形で、尖端は円みをおびた菱形の断面を示す。これも長頸で尖端より九・五センチの関の部分から断面は長方形となって、次第に正方形の断面になって柄の部分となっている。紫岩古墳・金鑑山古墳発見の鳴鏃用の平根鏃でなく、これまた実戦型の形容を示していると想定される。

土師器片は、内部主体部に副葬された状態だ





第5図 鉄鏃・土師器

く、封土表面から、土中に破片と  
なつて散在した状態で発見され、  
多くは墳墓の中心部に集中した状  
態で検出された。図3は外側に段  
が付されている。高坏の坏の部分  
で、4は高坏の脚部であり、いず  
れも胎土良好、焼成もかなりよ  
く、ヘラ磨きが行届いて赤褐色を  
呈し、土師編年では鬼高期のもの  
と推定される。この外の破片中に  
一点の坏部があつてこれは、坏と  
脚をホゾで接合し、接合部の径  
は、三・五センチである。土師器  
片は3・4の外、小片一三片、細  
片四四片を数え、ほとんど高坏片  
と想定される。

(檀原 長則)

結び

この古墳の発掘調査は、八月上旬の晴天続きに恵まれ、七日間行  
程で完了した。これは事前準備に二日間を費し万全を期したこと  
と、規模が小形で出土遺物の極めて僅少であつたためである。



第6図 発掘状況

豊野層から成る永峰丘陵の鞍部から一段下つた小台地に土曼頭状  
の径一八メートル、高さ四メートルの自然地形を利用して墳墓を築  
造したものであつた。墓は長さ三・九メートル、巾一・〇五  
一・一五メートルを掘りくぼめた竪穴式粘土郭で、木棺を納めたも  
のと推定し、納棺後円墳状に盛土をしている。

副葬品は、直刀(全長八二センチ)一口、鉄鏃(長さ一三〜一四  
センチ)はいずれも有柄のもので尖根鏃三本、平根鏃一本の計一  
四本は竪に納めた形状で検出された。これらは埋葬者の胸部から腰  
部に置かれて副葬された  
ものごとくである。墳  
頂の中央部からは土師器  
小片四八点が出土し、高  
坏は三〜四個体分にあた  
るかと思われ、鬼高期の  
ものと推定される。出土  
状態から祭祀のために供  
献されたものであらう。  
遺構の簡素なことと、  
副葬品の貧弱なものには驚  
かされた。既掘の双子塚  
古墳は河東最北端の大型  
前方後円墳であるにもか  
かわらず、副葬品の以外

に少ないことは奇とされているが、この前山古墳はそれにも増して僅少な副葬品であった。これは被葬者の経済力の低さを物語っているのではあるまいか。今後、周辺の遺跡や古墳群との関係を調査して、その性格を究めたい。

今回の調査にあたっては金井喜久一郎先生の指導助言を賜わり、地主藤沢栄治氏の御協力を得、長針功・小林行安・池田実治氏等の物心両面にわたる援助をいただいたことを感謝申しあげたい。

(金井 汲次)

5

6

三

1

2